第 165 回
立教大学チャペルコンサート

Chapel Concert

アメリカ人アーサー・バードの
リードオルガン作品

リードオルガン　**スコット・ショウ**

2024 年 10 月 3 日（木）
開場 12：10　開演 12：40
池袋チャペル会館マグノリア・ルーム

主催：立教大学
※会場内での飲食・撮影・録音はご遠慮ください。

プログラム

Praeludium Op. 37 No. 2 — Arthur Bird (1856–1923)
前奏曲 — アーサー・バード

Improvisato Op. 37 No. 6
インプロヴィザート

Pastorale Op. 37 No. 10
パストラーレ

Auf dem Lande Op. 37 No. 9
田舎で

Adagio Op. 37 No. 3
アダージョ

Barcarolle (from Trois Morceaux Op.1) — Camille Saint-Saëns (1835–1921)
バルカロール～「3 つの小品 作品 1」より — カミーユ・サン=サーンス

American Melodies — Arthur Bird
アメリカン・メロディーズより — アーサー・バード

Old folks at home	故郷の人々
Angel Gabriel	大天使ガブリエル
Star spangled banner	星条旗の歌

Scherzo Op. 37 No. 8 — Arthur Bird
スケルツォ — アーサー・バード

私が、最初のリードオルガンに出会ったのは 20 歳の頃でした。大学でパイプオルガンを学びながら、教会でパートタイムのオルガニストとして働いていました。教会にある 1860 年代のリードオルガンの歴史的価値は理解していたものの、弾きたいとは思わず、いつも教会のパイプオルガンで練習していました。

1989 年に日本に移住してからは、リードオルガンを見る機会や弾く機会が増えましたが、完全にパイプオルガンに集中していました。従って、パイプオルガンこそが「本物」のオルガンであり、リードオルガンはその代用品だと思っていたのです。しかし、徐々にこれらの控えめな楽器が非常に表現力豊かなオルガンであり、リードオルガンのために多くのオリジナル曲が作曲されていることに気づきました。

2020 年頃から、自分のリードオルガンが欲しいと思い始め、2021 年には立教大学の卒業生から、美しいリードオルガンを譲り受けるという奇跡的な出来事がありました。このオルガンは 1950 年からその家族に大切にされており、状態も非常に良好でした。現在マグノリア・ルームにあるすべてのリードオルガン同様、このオルガンは伊藤信夫さんによって愛情を込めて修復され、私は毎日このオルガンを弾いています。

リードオルガンを弾く喜びをどう表現すれば良いでしょうか？まず気づいたのは、ペダリングの強さによって風がオルガンに入る量をコントロールできることです。パイプオルガンとは異なり、リードオルガンは一定の風を必要とせず、時には強く、時には優しくポンプを踏むことで、その音色に直接反映されます。パイプオルガン奏者にとって、オルガンの風を自分でコントロールし、直接自分の感情を表現できるというのは、まさに新たな発見です。

この部屋にある 3 台のオルガンはすべて日本製ですが、それぞれ異なる時代に作られたものです。右側にある私のオルガンは最も古く、1921 年頃のものです。次に古いのは中央にある大きなヤマハ製のオルガンで、これは 1942 年に NHK 放送局のために作られました。一番新しいのは、左側にある小さなヤマハ製のオルガンです。どのオルガンも個性があり、それぞれが特定の音楽を他のオルガンよりも豊かに演奏します。

一番理解が難しいのは、大きなヤマハ製のオルガンです。パイプオルガンの場合、大きなオルガンを演奏することは小さなオルガンよりも楽しく、面白いことが多いですが、リードオルガンに関しては逆かもしれません。大きなオルガンほど音が不明瞭になり、演奏が難しくなるのです。私のオルガンは音が明瞭で素直であり、小さなヤマハ製のオルガンは、この部屋の中で最も明るく大きな音を出します。大きなヤマハ製のオルガンに何ができるのかを理解するのに何週間もかかりましたが、その後、このオルガンを演奏するのがとても好きになりました。このオルガンは非常に深みのある音を持っており、足でペダルを踏む感覚は非常に豊かで反応が良いです。このオルガンのために、当初考えていた全曲バードのプログラムを変更し、サン＝サーンスの「バルカロール」を含めました。この大きなオルガンの美しさを表すために、少なくとも 2 曲は選びたかったのです。そして、バードの「アダージョ」とサン＝サーンスの「バルカロール」は、その役割を見事に果たしてくれる曲だと思います。

アーサー・ホーマー・バード（1856-1923）は、アメリカの作曲家であり、長年ドイツで活動していました。マサチューセッツ州ケンブリッジで生まれ、ベルリンでオルガンと作曲を学び、その後ワイマールでフランツ・リストのもとで 1 年間学びました。メイソン＆ハムリン社から依頼を受けてリードオルガンのための短い組曲も作曲しました。Op. 37 の作品は、演奏に 3～4 分ほどかかります。それぞれの曲について詳しく説明することはしませんので、皆様が聴きながらその美しさや興味深い点を発見していただければと思います。

今日のプログラムにあるサン＝サーンスの曲を除けば、ほとんどの作品は Op. 37 に含まれています。しかし、私はバードの「アメリカン・メロディーズ」から 3 つの短い曲も選びました。これらは、1900 年頃アメリカのアマチュア音楽家が、自宅で今日この部屋にあるようなオルガンで演奏していた曲です。ぜひ、124 年前にタイムスリップしたつもりでお聴きください。

スコット・ショウ　*Scott Shaw*

アメリカ・シアトルのワシントン大学においてオルガンとハープシコードを学ぶ。ニューヨーク州ロチェスターのロチェスター大学イーストマン音楽院にてオルガン、合唱指揮法、音楽史を学び、1987 年に修士号、1991 年に演奏博士号を取得。1989 年から 2002 年まで長崎の活水女子大学音楽学部教授、同大学及び短期大学チャペルオルガニストを務める。アメリカ、イギリス各地のほか、日本国内では、サントリーホール、東京芸術劇場など様々な場所でソロオルガンリサイタルを行う。16 世紀から 21 世紀に至る作品を立教大学チャペル聖歌隊の活動を通して研究、演奏し、さらに、モーツアルト、フォーレ、カンプラ等のレクイエムや様々なミサ曲を含むコーラスとオーケストラのための作品を指揮する。また、日本国内の教会音楽家達の働きにも関心を示し、立教大学教会音楽研究所や日本聖公会の活動に積極的に取り組んでいる。

現在、立教学院教会音楽ディレクター、立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊隊長及び立教大学文学部キリスト教学科特別専任教授。

2024 年度チャペルコンサートの予定

池袋・新座の両チャペルでは、それぞれのパイプオルガンの魅力や個性的な音色を味わっていただける無料のコンサートを年に数回、事前申込による定員制で開催しています。申込方法など詳細は、立教大学チャペルホームページでご確認ください。申込受付期間中であっても、定員になり次第、申込受付を終了いたします。

なお、当日の模様は、後日、チャペル公式 YouTube チャンネルで配信する予定です。

開催日時	オルガン演奏	場　所	申込受付開始
11/23（土） 13：30	佐藤　雅枝 （立教新座中学校・高等学校オルガニスト）	新座チャペル	10/10（木）
2025 年 1/11（土） 13：30	マーク・フィッツェ （ベルン聖霊教会オルガニスト）	新座チャペル	12/11（水）
1/16（木） 12：40	遠藤　陽平 （立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊隊長補佐）	池袋チャペル	12/12（木）

上記予定は変更になる場合がございますので、ホームページなどでご確認ください。

【チャペル公式 YouTube チャンネルで配信中】

今年度開催したチャペルコンサートの動画をチャペル公式 YouTube チャンネルで配信しています。2025 年 3 月末までの期間限定配信です。ぜひ、ご覧ください。

YouTube